

2024 年度 南山大学人文学部日本文化学科
卒業論文

尾張方言と三河方言の言語意識と差異について

占部 聖真

指導教員

平子 達也 准教授

要 旨

尾張方言と三河方言の言語意識と差異について

2025 年 1 月 20 日

占部 聖真

この論文の目的は、愛知県内の主要な方言である尾張方言と三河方言が持つイメージを調査し、同県内の異なる方言に対する言語意識の差異を明らかにするとともに、その差異がどのような要因に起因しているのかを考察することである。

従来の言語意識研究では都道府県単位を対象とするものが多く、同一県内に存在する複数の方言間におけるイメージの違いを具体的に検証した研究は十分ではなかった。本稿では、愛知県内で話される尾張方言と三河方言を例に取り、アンケート調査によって得たデータを SD 法とテキストマイニングを用いた分析を行い、それぞれの方言がどのような評価を受けているかを検討した。

調査の結果、尾張方言は「標準語から乖離している」「乱暴」「不明瞭」といったネガティブな評価を受ける傾向がある一方で、文末表現の力強さや独特のアクセントにより、「個性が強い」「地域性を感じさせる」といった魅力として認識される場合もあることが確認された。一方、三河方言は「標準語に近い」「穏やか」「上品」といったポジティブな評価を得やすく、特に柔らかく聞き取りやすいといったイメージを持つものと評価された特徴が支持された。このような評価の違いは、尾張方言が強調的で力強いアクセントや文末表現を持つのに対し、三河方言が尾張方言に比べて穏やかで標準語に近いアクセントを特徴とすることに起因していると考えられる。

また、愛知県内の方言話者と他地域の方言話者を比較した分析から、愛知方言話者の中には、自身の方言に対してネガティブな印象を抱く、いわゆる「方言コンプレックス」を有している可能性があることが分かった。特に、尾張方言話者が自分の方言に対して標準語との差異を強く意識し、評価を控えめにする傾向が見られた。

目次

1. はじめに	1
2. 愛知方言について	1
2.1 愛知方言の概要	1
2.2 尾張方言の特徴	2
2.3 三河方言の特徴	3
3. 方言イメージの先行研究の概観	3
3.1 方言イメージの分類	3
3.2 土佐方言・出雲方言の印象調査	5
3.3 方言コンプレックス	6
3.4 先行研究のまとめと整理	6
4. 調査方法	7
4.1 Google フォームによるアンケート調査	7
4.2 SD 法	7
4.3 テキストマイニング	8
5. 調査結果と考察	8
5.1 SD 法の調査結果	8
5.2 テキストマイニングの調査結果	11
6. 差異の分析・考察	12
6.1 方言評価の考察	13
6.2 方言コンプレックスの考察	14
7. おわりに	15

1. はじめに

本稿の目的は、愛知県内の主要な方言である尾張方言と三河方言が持つイメージを調査することで、同県内の異なる方言に対する言語意識の差異が存在するかどうかを明らかにし、その言語意識の差が、どのような要因から生じているのかを考察する事である。

方言がどのようなイメージを持たれているのか、という言語意識の研究は井上（1989）の東北弁・東京弁・京都弁のイメージに関する調査や方言イメージのパターンをまとめた研究など、様々ある。しかし、その対象は日本語諸方言全体にわたるものや、大きな地方でまとめた方言の研究が多く、同県内における異なる方言を対象にした研究は見当たらない。しかし、例えば愛知県において尾張方言と三河方言が存在しているなど、同一の都道府県内部にも異なる方言が存在している。そのため、同県内でも異なる方言同士でイメージが異なる可能性が指摘できる。そこで、本研究では同じ愛知県内における尾張方言と三河方言という異なる方言2つのイメージの差異を明らかにするためにアンケートによる調査を試みた。

アンケート調査とその分析に際しては、方言のイメージとしてはプラスに評価される面とマイナスに評価される面とがあることを考慮した。これは、金沢（1991：122-123）が、「さまざまな方言に対する意識や評価を一律に捉えることは不可能であるが、われわれの日常的な生活や社会の中で方言がどのように受け止められているかを考える場合には、今示した、一見（プラスとマイナスに）相反する二つの意識・評価を常に念頭に置くことが必要となるだろう」と述べていることによる。そこで、本調査では、イメージの差異を明らかにする観点として、尾張方言と三河方言のプラスに評価される面とマイナスに評価される面の比較をすることとした。

本稿の構成は以下の通りである。まず、2節にて愛知方言の概要を明らかにし、尾張方言と三河方言の主な違いを整理する。続く3節では、先行研究を整理して、日本語諸方言に対するイメージに関する研究がどのように行われてきたかを紹介する。4節にて、調査方法を整理する。5節では、アンケートを用いた尾張方言と三河方言のイメージ調査の結果を示す。6節では、2節で整理した尾張方言と三河方言の言語的な差異を参考にしながら、アンケート調査の結果を分析・考察していく。7節は本稿のまとめである。

2. 愛知方言について

2.1 愛知方言の概要

愛知県は東部方言と西部方言の境界とも言える中部地方に位置し、位置的な特徴はそのまま言語にも反映されている。芥子川（1982：212）は、「愛知県の方言は東西二大方言の交錯地帯であり、その上に中部方言的な特別な要素をも含んでいてきわめて複雑である。」「愛知県の方言は語法・語彙から見ればより近畿的であり、アクセントは乙種アクセントで関東的であり、音韻の面は東西相半ばするといつてよい。そのいずれに比重をおくかによって、東部方言ともなり西部方言ともなる。」と愛知方言の特徴を述べており、東西方言の特徴が

混在している点が愛知方言の特徴であるということが分かる。また、東西方言の接点という特徴は新しい方言にも作用している。「中部地方は、東西方言の接点であることから、両方の言語要素を取り入れて、新しい方言系が生まれること少くない。動詞の否定形に「ナル」「スル」がついた「～ないようになる」「～ないようにする」に相当する表現として、東海地方の若年層ではよく「～ンクナル」「～クスル」の形が用いられる。これは、西日本的な否定辞「～ン」（あるいは「～ヘン」も）が共通語表現の「～なる」「～する」と組み合わせられて新しい方言形（ネオ方言）を形成した例である。」と山田（2011：62）による東海地方のネオ方言形成の指摘にあるように、東西方言の両要素を取り入れた新しい方言を形成する動向も愛知方言の特徴の1つと言える。

東西方言の特徴が混在している愛知方言だが、愛知県内でも方言が分かれており、大きく分けて尾張方言と三河方言の2つの方言が存在する。芥子川（1982：213）によれば、尾張方言と三河方言の境界は旧尾張の国、三河の国の国境が相当するとみてよい。また、知多半島の南半は三河方言にふくめるべきであると指摘している。尾張方言の内部でも小さな変異が見られたり、三河方言の内部でも西三河と東三河でいくつか異なる点が存在したりするが、本稿では愛知方言を大きく2つに分けた尾張方言と三河方言を対象として扱うこととする。

2.2 尾張方言の特徴

尾張方言の特徴として、まず挙げられるのは名古屋方言に特徴的にみられる連母音の融合である。芥子川（1982：216）によれば、名古屋市を中心とする尾張の平野部は東京語の ai、ui、oi がそれぞれ[æə][y:] [ø:]と融合するのが特徴であるという。例（間[æəda] 薄い[usy:] 遠い[toø:]）この連母音の融合については、アンケートの自由記述に言及があった。

続いて、形容詞のアクセントに関する特徴である。三音節、四音節の形容詞のアクセントは、同じ愛知県内の方言であっても、尾張方言と三河方言で大きな差異が存在する。赤イ、厚イなどの東京語において平板型の語は、名古屋では全て中高型に発音される。さらに、青イや暑いなどの東京語において中高型の語は名古屋地方でも中高型であるので、名古屋では厚イも暑イも共にアツイとなっていてアクセントの区別の意識がない。（芥子川 1982：226）また、擬声語・擬態語については、クヨクヨ、ゲラゲラ、ゴタゴタと第二音節が高くなる特徴がある。

主張の表現も特徴的であり、尾張と三河で語尾が異なる。尾張ではガヤ・キャー・ギャーを用いる。「おればっか損だガヤ」「そうも言わんでもええギャー」「そんなこと知らすキャー」のように使用する。（芥子川 1982：240-241）

ガヤ・キャー・ギャーはアンケート調査から尾張方言（名古屋弁）を代表するイメージがあるという言及があり、特有の文末表現が尾張方言のイメージに大きな影響を与えていた。

2.3 三河方言の特徴

三河方言の三音節、四音節の形容詞のアクセントは前述の尾張方言とは異なり、平板型のアクセントを保っている。東京で平板型で現れる語は三河方言においても、そのまま平板型の語として発音される。擬声語・擬態語に関しても(クヨクヨ、ゲラゲラ、ゴタゴタ)と頭高型のアクセントとなっていて、尾張方言のアクセントと異なる。

主張の表現では、西三河ではガネを用いて、「うちへ来やいいガネ」のように使用する。東三河ではジャンカを用いて、「こりゃわしのジャンカ」「わしと一緒にやりゃイイジャン」のように使用する(芥子川 1982: 226-227)。

また、相手に同意や確認を得る際、文末に「ダラ」を使用して「明日、学校あるダラ？」等のように話したり、勧誘の表現で文末に「リン」を使用して「これ、やってみリン」等、文末が変化する表現が特徴である。「ジャン」「ダラ」「リン」は三河方言の大きな特徴であると言え、実際アンケートの中でもこれらの特徴についての言及があった。

3. 方言イメージの先行研究の概観

井上(1989)は、言語心理学の手法であるSD法を用い、方言イメージを分類した。また、金沢(1991)は、方言の評価がプラスとマイナスの二極に分かれることを示した。これらの枠組みは、本研究で行う尾張方言と三河方言の評価にも適用可能であると考えられる。吉永・村瀬(2022)の研究では、特定の方言が持つ対人的魅力や知的印象の違いが示されたが、これらは尾張方言と三河方言のように同一県内で話される異なる方言にも共通する傾向が見られる可能性を示唆している。さらに、早川(2002)の研究が明らかにした方言コンプレックスも同様に、同県内における方言話者同士の言語意識の差異を考察する上で、尾張方言と三河方言の評価にも適用可能な視点であると考えられる。

これらの先行研究を踏まえることで、本研究では、愛知県内の尾張方言と三河方言における言語意識の差異がどのように現れ、その背景にはどのような要因があるのかを検討する。以下、上記の研究についてやや詳しく見ていく。

3.1 方言イメージの分類

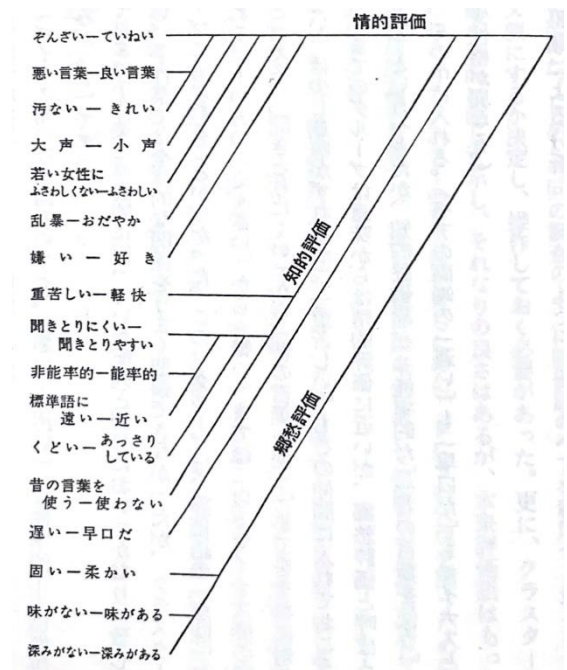
井上(1989)は、方言調査を進めていく中で、人々がよその(または自分の)言葉について様々な評価を与えるのに気づき、その評価が、ある程度パターンとして決まっていると考え、方言に関する言語意識のイメージを調査した。

井上は、言語の評価によく用いられる17組34語の評価語(ぞんざいーていねい、悪い言葉ー良い言葉、汚いーきれい、大声ー小声、若い女性にふさわしいー若い女性にふさわしくない、乱暴ーおだやか、嫌いー好き、重苦しいー警戒、聞き取りやすいー聞き取りにくい、非能率的ー能率的、標準語に遠いー標準語に近い、くどいーあっさりしている、昔の言葉を使うー昔の言葉を使わない、遅いー早口だ、固いー柔らかい、味がないー味がある、深みが

ないー深みがある）を使用し、言語心理学における SD 法を用いて、方言イメージをパターンと結びつけることによって方言のイメージを分類している。SD 法とは、「意味微分法」とも言い、相反する形容語を両端に置き、ふさわしいと思う方に近い尺度を選択することで、対象に関する意識を数値化する分析方法である。

井上は、その調査結果を以下の図 1 と表 1 のように、特に東北弁・東京弁・関西弁については評価をパターン化することで直感的に分かりやすくまとめている。

〈図 1：井上（1989：179）〉



〈表 1：井上（1989：198）〉

郷愁評価	知的評価	情的評価	代表	分類
+	-	-	東北弁	(辺境型) 田舎型
-	+	+	東京弁	(中央型) 近代都市型
+	-	+	関西弁	古都型

まず、図 1 は、17 組 34 語の印象評定語をクラスター（集群）分析というデータをデータポイント間の距離を使用して、類似性に基づき、グループに分ける手法を用いてグループに分けたものである。印象評定語をグループ化する際に、データポイント間の「距離」だけでなく、それぞれの評価語が持つ「意味」の関連性にも基づいて分類を行った。この結果、評価語は 3 つの大きなグループに分けられた。それぞれのグループは以下のような特徴を持っている。

・情的評価（感情的な評価）

このグループには、「ぞんざい」「乱暴」「嫌い」など、話し手や聞き手の感情や態度に関連する評価語が含まれている。このグループは、相手に対する感情的な印象や態度を表現する評価語を集めたものとされる。

・知的評価（理知的な評価）

2 つ目のグループには、「知的ではない」「標準語に遠い」など、理知的で合理的な印象を評価する語が含まれる。このグループは、聞き手がその方言や話し手に対して抱く知的なイメージを基準とする評価語で構成されている。

・郷愁評価（懐かしさや親しみの評価）

最後のグループには、「固い」「味がない」「深みがない」といった語が含まれる。このグループは、情的評価に近いが、方言や話し手が引き起こす郷愁や親しみの感覚に関連している。このカテゴリーを井上は「郷愁評価」と名付けた。

表 1 は、井上（1989）が調査した東北弁・東京弁・関西弁方言イメージの評価を前述のグループ分けした印象評定語（情的評価・知的評価・郷愁評価）を使用し、田舎型（辺境型）・近代都市型（中央型）・古都型の 3 パターンに分けたものである。この表によると、東北弁は田舎型（辺境型）に分類され、情的評価と知的評価がマイナスに評価される一方、郷愁評価がプラスに評価されている。東京弁は近代都市型（中央型）に分類され、田舎型（辺境型）に分類される東北弁とは対照的に情的評価と知的評価がプラスに評価される一方、郷愁評価がマイナスに評価された。そして、関西弁は古都型のパターンに分類され、情的評価と郷愁評価がプラスに評価される一方、知的評価がマイナスに評価された。

この井上（1989）の研究を受けて、金沢（1991）は、方言の意識やイメージを大きく次の 2 つに分けた。

- (1) 背景となる、その土地固有の生活や文化をうかがわせ、ニュアンスに富み、美しく豊かで味のあるものとして、積極的に評価する。〔プラスの評価〕
- (2) 一般（共通語あるいは中央語）と異なる変わったものと見て、驚きや目新しさを感じると同時に、悪く劣ったものとして一段低く評価し、笑いや嘲りの対象とする。〔マイナスの評価〕

更に、方言を評価する事に対して「さまざまな方言に対する意識や評価を一律に捉えることは不可能であるが、われわれの日常的な生活や社会の中で方言がどのように受け止められているかを考える場合には、今示した、一見（プラスとマイナスに）相反する二つの意識・評価を常に念頭に置くことが必要となるだろう」と述べている。（金沢 1991：122-123）

3.2 土佐方言・出雲方言の印象調査

吉永・村瀬（2022）は、島根大学の学生 44 人を対象に（1）相手も話者も共通語を話す場合（2）相手が共通語で話者が出雲方言の場合（3）相手が土佐方言で話者が共通語の場合（4）相手が土佐方言で話者が出雲方言の場合の 4 つの群で、親しい友人と久しぶりに偶然出会ったという設定の会話文の音読を聞かせて、19 の印象評定形容語（素直な、礼儀正しい、人に左右されない、信頼できる、社交的な、素朴な、知的な、積極的な、正直な、教養のある、自信がある、明るい、情にほだされる、親切的な、冷静な、共感的な、温かい、真面目な、自己主張が強い）について 5 段階（ふさわしくないを 1 点～ふさわしいを 5 点）で評定してもらい、方言のイメージを調査した。その結果、出雲方言は共通語より人柄が良いと思われて対人的な魅力も高く評価された一方、知性を低く見積もられる傾向があり、相手が土佐方言話者であっても出雲方言は同じ印象を持たれた。

3.3 方言コンプレックス

早川（2002）は、茨城方言話者が抱く「方言コンプレックス」のメカニズムを解明するために、標準語話者との比較を通じて、地域社会における言語と自己認識の関係を詳細に分析した。茨城方言話者が他者から受けるイメージだけでなく、方言話者自身が自分の方言に対して持つ自己評価に注目し、方言コンプレックスがどのように形成され、維持されるのかを明らかにしている。

調査では、茨城方言話者が「素朴」「温厚」といったポジティブな特性とともに、「古くさい」「洗練されていない」といったネガティブな評価も受ける傾向があることが示された。対照的に、東京語話者は「都会的」「知的」と評価されることが多く、標準語が持つ社会的権威や先進的イメージが浮き彫りになった。この差異は、方言話者が他者から受ける評価にとどまらず、自分自身の言語使用に対する認識や態度にも影響を及ぼし、自身の方言を否定的に捉える「内在化された偏見」として現れることを指摘している。さらに、方言の使用頻度と方言コンプレックスの強度との間に密接な関連があることを明らかにした。茨城方言を頻繁に使用する話者ほど、他者からのネガティブな評価をより直接的に受け、その結果、自己評価が低下するという負のスパイラルに陥る傾向が見られた。また、この自己評価の低下は、地域社会内における標準語話者との比較を通じてさらに強化されるということを述べている。

3.4 先行研究のまとめと整理

以上の先行研究から、方言の言語意識はいくつかのパターンに分類されると共に、そのイメージにはプラスとマイナスのイメージが存在するということが分かる。例えば、井上（1989）の方言イメージのパターン化の研究を受けた金沢（1991）が相反する二つの意識・評価を常に念頭に置くことが必要となるだろうと指摘している。また、吉永・村瀬（2022）の研究では、出雲方言が対人的な魅力も高く評価された一方、知性を低く見積られる傾向を持っていた事が指摘されている。そして、早川（2002）が方言コンプレックスの研究では、茨城方言話者が「素朴」「温厚」といったポジティブな特性とともに、「古くさい」「洗練されていない」といったネガティブな評価も受ける傾向が認められた。つまり、方言に対する意識は一定のパターンに分類され、そこには大きくプラスとマイナスのイメージが存在するのである。

しかし、先行研究では東北弁・東京弁・関西弁方言、そして土佐方言・出雲方言・共通語、茨城方言と共通語など、いずれも異なる都道府県で話される方言どうしを比較しており、同県内の言語意識の差については扱っていない。一方で、同一県内でも異なる方言が話されている。例えば、愛知県内では尾張方言と三河方言という異なる方言が話されているが、これら2つの方言の話者は、日常的に学校や職場などで交流することがあり、互いにある程度なじみがあるものの、一方で、そのことなりについても日常的に意識されやすいものと考えられる。本稿では、同県内において話される方言であっても、それらが異なる方言に対する言語

意識の差異がある可能性を考慮し、愛知県内の2つの方言、つまり尾張方言と三河方言を対象に調査する。

4. 調査方法

SD法を用いて言語意識を数値化することで尾張方言と三河方言に対する言語意識の差異を明確にし、同県内の異なる方言間で言語意識の差異の存在を明らかにするために、Googleフォームによってアンケート調査を行った。この節では、Googleフォームによるアンケート調査と調査した結果を分析して提示するSD法、テキストマイニングという本研究で使用する調査方法並びに分析方法について説明する。

4.1 Google フォームによるアンケート調査

本調査は年齢と性別、出身地、使用方言を問わない50名を対象にGoogleフォームによるアンケートによって行った。尾張方言と三河方言による「桃太郎」の朗読を聞いてもらうことで方言イメージを回答してもらった。方言イメージの回答には井上(1989)と吉永・村瀬(2022)の印象評定語を基に選定した17組34語の印象評定語(ぞんざいー丁寧、悪いー良い、汚いー綺麗、乱暴ー穏やか、嫌いー好き、標準語に遠いー標準語に近い、下品ー上品、速いー遅い、無礼ー礼儀正しい、ふまじめーまじめ、つめたいーあたたかい、知的ではないー知的である、不明瞭ー明瞭、田舎的ー都会的、親しみにくいー親しみやすい、固いー柔らかい、深みがないー深みがある)を7段階の尺度で回答する質問と各方言のイメージを自由に記述する質問の2パターンを用意した。

(1) 性別 (2) 両親の母方言 (3) 祖父母の方言 (4) 祖父母との同居経験 (5) 自身の使用方言 (6) 尾張方言に対するイメージ(7段階の尺度) (7) 尾張方言の発音や文法や使われている表現について感じたこと(自由記述) (8) 三河方言に対するイメージ(7段階の尺度) (9) 三河方言の発音や文法や使われている表現について感じたこと(自由記述) (10) 尾張方言と三河方言を比べて感じたこと(自由記述形式)の10種の質問を用意し、Googleフォームによるアンケートで調査した。

4.2 SD法

SD法(Semantic Differential: 意味微分)とは、相反する形容語(例: あたたかいーつめたい)を両端に置き、ふさわしいと思う方に近い尺度を選択することで、対象に関する意識を数値化する方法である。本調査における相反する形容語は、前述の井上(1989)と吉永・村瀬(2022)の印象評定語を基に選定した17組34語の印象評定語を使用する。各印象評定語の組に対する数値化した意識の平均を取り、尾張方言と三河方言に対する言語意識をグラフとして提示、比較していく。

4.3 テキストマイニング

テキストマイニングとは、大量のテキストデータから有用な情報や知識、頻度を抽出する方法である。本調査では、アンケートにて尾張方言と三河方言に対する自由記述形式の質問を用意しているため、アンケートによって得られたテキストデータをテキストマイニングを使用し、共通するワード、頻度を抽出することで尾張方言と三河方言に対する言語意識と、その傾向を提示し、調査していく。テキストマイニングは ChatGPT を利用する。本研究では、尾張方言と三河方言に関連する単語の出現頻度とその意味内容を分析対象とした。

5. 調査結果と考察

本調査は、年齢と性別、出身地、使用方言を問わない 50 名に Google フォームを用いたアンケートで調査を行っている。性別の割合が男性 36.7%、女性 63.3%である。使用方言の割合は、三河方言が 44.7%、尾張方言が 38.3%、東海（愛知以外）が 8.5%、関西が 4.3%、九州が 4.3%となっている。

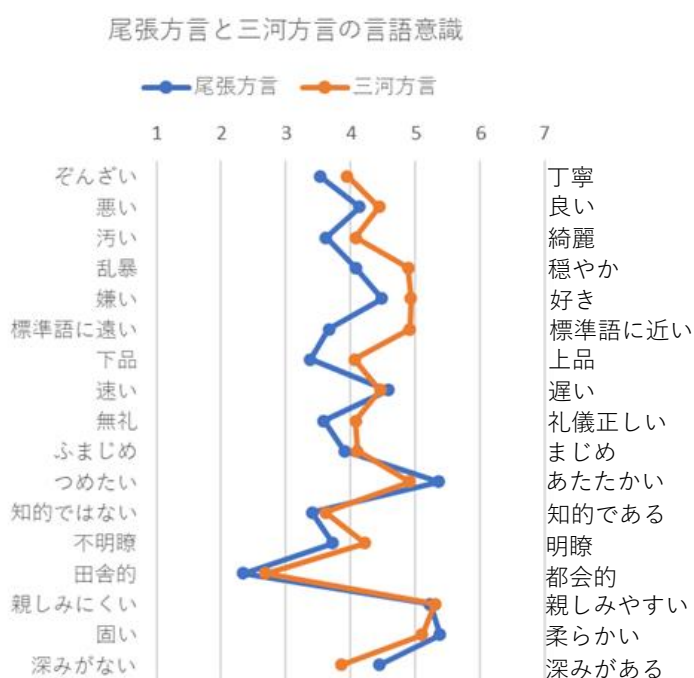
5.1 SD 法の調査結果

〈表 2〉がアンケート調査における SD 法の数値の平均をまとめた表であり、〈図 2〉が〈表 2〉をグラフ化したものである。尾張方言と三河方言で最も数値の差が大きい印象評定語は（標準語に遠い－標準語に近い）で 1.25 の差異が現れ、三河方言の数値の方が高かった。最も差が小さい印象評定語は（親しみにくい－親しみやすい）でその差は 0.07 であり、三河方言の方の数値が高かったものの、両方言においてほぼ同じ評価がされたと言える。1.00 以上の差が現れた印象評定語は（標準語に遠い－標準語に近い）のみで、他に尾張方言と三河方言で顕著に表れる差異は存在せず、グラフも似たような形になった。しかし、（標準語に遠い－標準語に近い）以外にも（乱暴－穏やか）で 0.81, （下品－上品）で 0.68, （深みがない－深みがある）で 0.59, （無礼－礼儀正しい）で 0.50, （不明瞭－明瞭）で 0.50 と 0.50 以上の差がある印象評定語が計 6 項目あった。この内、（深みがない－深みがある）のみ尾張方言の数値が高いが、その他は、いずれも三河方言の数値の方が高く、これらの項目において多少の差異が認められる結果となった。

〈表 2〉

印象評定語	尾張	三河
ぞんざいー丁寧	3.52	3.95
悪いー良い	4.14	4.44
汚いー綺麗	3.62	4.08
乱暴ー穏やか	4.08	4.89
嫌いー好き	4.48	4.93
標準語に遠いー標準語に近い	3.66	4.91
下品ー上品	3.38	4.06
速いー遅い	4.58	4.46
無礼ー礼儀正しい	3.58	4.08
ふまじめーまじめ	3.9	4.1
つめたいーあたたかい	5.36	4.91
知的ではないー知的である	3.4	3.61
不明瞭ー明瞭	3.72	4.22
田舎的ー都会的	2.34	2.69
親しみにくいー親しみやすい	5.22	5.3
固いー柔らかい	5.38	5.1
深みがないー深みがある	4.44	3.85

〈図 2〉



また、尾張方言や三河方言の母語話者と、それ以外の母語方言話者とに分けて SD 法の表をまとめると、以下の〈表 3〉と〈表 4〉のようになる。〈表 3〉が尾張方言や三河方言を生まれながらに使用している話者の表で、〈表 4〉が尾張方言・三河方言話者以外の表である。

2つの表を比較すると、全体的に〈表 3〉の数値より〈表 4〉の数値の方が高い事が分かる。つまり、尾張方言や三河方言の母語話者の方がそれ以外の方言の母語話者よりも、自分たちの方言に対してネガティブに認識しているということである。

〈表 3〉

印象評定語	尾張	三河
ぞんざいー丁寧	3.28	3.91
悪いー良い	4.04	4.46
汚いー綺麗	3.58	4.07
乱暴ー穏やか	3.83	4.89
嫌いー好き	3.82	4.94
標準語に遠いー標準語に近い	3.76	5
下品ー上品	3.16	4
速いー遅い	4.4	4.28
無礼ー礼儀正しい	3.4	4.07
ふまじめーまじめ	3.86	4.1
つめたいーあたたかい	5.33	5
知的ではないー知的である	3.28	3.5
不明瞭ー明瞭	3.71	4.23
田舎的ー都会的	2.28	2.67
親しみにくいー親しみやすい	5.28	5.53
固いー柔らかい	5.33	5.14
深みがないー深みがある	4.3	3.7

〈表 4〉

印象評定語	尾張方言	三河方言
ぞんざいー丁寧	4.75	4.13
悪いー良い	4.62	4.38
汚いー綺麗	3.87	4.13
乱暴ー穏やか	5.13	4.89
嫌いー好き	5.38	4.88
標準語に遠いー標準語に近い	3.13	4.5
下品ー上品	4.5	4.38
速いー遅い	5.5	5.38
無礼ー礼儀正しい	4.5	4.13
ふまじめーまじめ	4.13	4.13
つめたいーあたたかい	5.5	4.5
知的ではないー知的である	4	4.13
不明瞭ー明瞭	3.75	4.13
田舎的ー都会的	2.63	2.8
親しみにくいー親しみやすい	4.89	4.13
固いー柔らかい	5.63	4.89
深みがないー深みがある	5.13	4.63

続いて、尾張方言話者と三河方言話者のみの数値を表でまとめた。以下の〈表 5〉が尾張方言話者、〈表 6〉が三河方言話者の数値である。2つの表を比較すると、尾張方言話者は、自身が話す尾張方言よりも三河方言の方をポジティブに認識している印象評定語が目立つ。一方、三河方言話者の場合は、尾張方言と三河方言とで、その評価に大きな差はなかった。

〈表 5〉

印象評定語	尾張方言	三河方言
ぞんざいー丁寧	3.61	4.39
悪いー良い	4.05	4.72
汚いー綺麗	3.22	4.44
乱暴ー穏やか	4.17	5.53
嫌いー好き	4.44	4.83
標準語に遠いー標準語に近い	4.17	4.89
下品ー上品	3.22	4.61
速いー遅い	4.72	5.06
無礼ー礼儀正しい	3.33	4.61
ふまじめーまじめ	3.83	4.5
つめたいーあたたかい	5.67	5.28
知的ではないー知的である	3.28	3.94
不明瞭ー明瞭	3.44	4
田舎的ー都会的	2.11	3.11
親しみにくいー親しみやすい	5.28	5.28
固いー柔らかい	5.61	5
深みがないー深みがある	4.56	3.94

〈表 6〉

印象評定語	尾張方言	三河方言
ぞんざいー丁寧	3	3.6
悪いー良い	4.04	4.3
汚いー綺麗	3.48	3.9
乱暴ー穏やか	3.62	4.5
嫌いー好き	4.19	5.3
標準語に遠いー標準語に近い	3.52	5.15
下品ー上品	3.1	3.05
速いー遅い	4.1	4.65
無礼ー礼儀正しい	3.52	3.05
ふまじめーまじめ	3.8	3.8
つめたいーあたたかい	5	4.75
知的ではないー知的である	3.24	3.15
不明瞭ー明瞭	3.9	4.4
田舎的ー都会的	2.42	2.35
親しみにくいー親しみやすい	5.24	5.75
固いー柔らかい	5.04	5.2
深みがないー深みがある	4.1	3.5

5.2 テキストマイニングの調査結果

アンケート調査で得た自由記述を基に、OpenAI の提供する ChatGPT を利用してテキストマイニングによる分析を行なった (OpenAI, 2024)。自由記述データを入力し、意味内容の頻度分析を実施し、頻度の高い単語に絞って表にした。その表が〈表 7〉である。

〈表 7〉

頻出単語	頻度（尾張方言）	頻度（三河方言）
語尾	5	7
柔らかい	3	4
標準語	2	6
りゃあ	3	4
特徴	4	5
田舎	2	3
ゆったり	1	3
強調	3	2
温厚	2	3
緩やか	0	2
キツイ	2	1
じゃん	0	3
げな	3	0
お年寄り	2	2

尾張方言と三河方言共に文末に対する記述が最も多く、両方言の特徴を文末に強く感じる人が多いことが示唆される。内容としては、尾張方言が「語尾に強い特徴があると感じた」や「語尾の「げな」が印象的だった」、三河方言が「「じゃん」「だら」「りん」の印象」、「「りん」が付いているイメージ」といった意見が多く、両方言特有の文末表現について印象を強く持っている事が窺える。また、尾張方言の文末が「強い特徴」とされる一方で、三河方言の文末は「柔らかい」というポジティブな印象が多かった。

続いて、前述の SD 法で唯一 1.00 以上の差異が現れた（標準語に遠い－標準語に近い）の印象評定語に着目して、それに関する内容を見ていくと、尾張方言がアクセントや訛りの理由で標準語から乖離しているという意見の一方、三河方言では、「尾

張よりも標準語に近いイメージ」や「三河の方が標準語に近い感じがした」といった意見があった。SD 法のグラフ通り尾張方言と三河方言は標準語への近さという観点では、両者に差異を感じている人が多いことがテキストマイニングの分析からも分かる。

以上、テキストマイニングの分析から分かる両方言の傾向をまとめると、〈表 8〉のようにまとめることが出来る。

〈表 8〉

特徴	尾張方言	三河方言
文末の特徴	「りゃ」「げな」など強い訛りが特徴	「～りん」など柔らかい表現
標準語との違い	標準語との乖離が大きい	標準語に近いとされる
感情表現	感情表現が豊か、強調される	穏やか、控えめな印象
田舎的なイメージ	強い訛りのため田舎感があると感じる	訛りが弱く、控えめな印象
話し方のリズム	ゆっくりで感情を込めることが多い	緩やかだがきびきびした雰囲気

6. 差異の分析・考察

本節では、アンケート調査の結果から、印象評定語の中で数値の差が 0.50 以上現れた（標準語に遠い－標準語に近い）、（乱暴－穏やか）、（深みがない－深みがある）、（下品－上品）、（無礼－礼儀正しい）、（不明瞭－明瞭）の 6 項目について検討する。また、それらと方言コンプレックスとの関係について考察した結果を述べる。

6.1 方言評価の考察

まず、印象評定語の中で差が顕著に現れた項目のうち、井上(1989)が提示した印象評定語のグループにおいて、(標準語に遠い－標準語に近い)と(不明瞭－明瞭)は、「知的評価」に分類され、(乱暴－穏やか)と(下品－上品)、(無礼－礼儀正しい)は「情的評価」に属し、(深みがない－深みがある)は「郷愁評価」に属する。以下では、アンケート結果と先行研究の知見を関連付け、さらに尾張方言と三河方言の特徴を踏まえながら、どのような点に差異があり、そしてそれがどのような背景によるものなのか、考察を行う。

(1) 標準語に遠い－標準語に近い

この項目は、尾張方言と三河方言の間で最も大きな差 1.25 が見られ、尾張方言が「標準語に遠い」と評価される一方で、三河方言の方が評価の数値が高く、「標準語に近い」と評価された。尾張方言に特徴的な「げな」「だがや」「りゃ」などの文末表現や連母音の融合が、標準語からの乖離を印象付けていると考えられる。一方、三河方言でも同様に「じゃん」「だら」「りん」といった特徴的な文末表現が用いられるものの、音韻的には標準語に近く、標準語により近いと評価されたと考えられる。

(2) 乱暴－穏やか

この項目では、尾張方言が「乱暴」と評価され、三河方言が「穏やか」と評価された。尾張方言の語尾「りゃ」「げな」や感情を強調する響きが、時に「力強い」または「攻撃的」と受け取られる可能性がある。一方、三河方言は「じゃん」「だら」「りん」といった語尾が柔らかい印象に受け取られたのだと考える。これらの差異は、語尾表現や発音の特徴が由来していると考えられる。

(3) 下品－上品

尾張方言が「下品」、三河方言が「上品」と評価された背景には、文末表現のニュアンスが大きく影響している。尾張方言では、「だがや」「だぎゃー」などの文末表現が強調されることで、聞き手に「荒々しい」印象を与えることがある。また、記述の回答から名古屋弁に対する「キツイ」イメージが、テレビ番組や大衆文化を通じて広まっていることも、この評価に影響を与えた可能性が高い。一方、三河方言の「じゃん」「りん」といった表現の柔らかい語感が尾張方言と比較すると、聞き手に温和で上品な印象を与えるのではないかと考える。

(4) 無礼－礼儀正しい

尾張方言が「無礼」と評価された理由として、文末表現の断定的な響きが挙げられる。「だがや」「だぎゃー」といった文末表現は、自らの主張を強調する性質があり、聞き手に対して「威圧的」と感じられる場合がある。これに対し、三河方言の特徴とされるのは、「じゃん」「だら」といった文末表現は、確認や同意を求めるものであり、その「確認」「同意」といった意味から、聞き手に「柔らかく配慮がある」という印象を与えたと考えられる。

(5) 不明瞭－明瞭

尾張方言の発音の特徴である連母音の融合やアクセントの違いが、「不明瞭」と評価される要因となった可能性がある。特に、標準語の「あい」を→「æə」と発音するなどの連母音の融合は、尾張方言に馴染みのない人々にとって聞き取りづらく感じられ、強い「訛り」と感じ取られる可能性がある。一方で、尾張方言は感情を強調する発音も多く、これが結果的に「分かりづらい」という印象を与えることがある。三河方言は、標準語に近いアクセントと語尾の柔らかい響きから「明瞭」と評価されたと考えられる。

(6) 深みがない－深みがある

0.50 以上の数値の差がある印象評定語の中で、尾張方言が唯一プラス評価を受けた印象評定語である。井上（1989）の方言パターンから分かるように標準語に乖離している方言の方が郷愁評価をプラスに評価される傾向がある。この評定語も井上（1989）のパターンに適用されるように尾張方言と三河方言を比較すると、尾張方言が標準語に遠い特徴を持っているため、尾張方言は郷愁評価がプラスに評価され、深みがあると評価されたのだと考えられる。

以上を踏まえて、尾張方言は三河方言と比較すると、知的評価と情的評価がマイナス評価を受け、郷愁評価がプラス評価を受けることが分かった。これは、井上（1989）の研究における、田舎型（辺境型）の東北弁のパターンと一致するものである。

東北弁は、大西（1993）の東北弁の特徴によれば、ズーズー弁と呼ばれる特徴がある。これは、シとスとシュ、ジとズとジュ、チとツとチュの区別が無く、「梨」「茄子」「知事」「地図」の区別が発音上されないという特徴である。また、母音に関しては、共通語でのアイ・ア・エの連母音に当る部分が [ɛ] という共通語のエより広い母音で発音され、例えば、「高い」は [tagɛ]、「前」は [mɛ] というようになるといった特徴がある。この東北弁のこうした特徴は、尾張方言の特徴と一部重なる。特に、標準語の連母音が変化するという特徴は両者に共通するものである。こうした発音上の特徴を背景に、尾張方言は、知的評価と情的評価がマイナス評価を受け、また、郷愁評価がプラス評価を受けることとなったと考えられる。結果として、尾張方言は（三河方言との比較において）田舎型（辺境型）のパターンに分類される。先行研究での指摘の通り、やはり、標準語から遠い＝知的評価並びに情的評価のマイナスイメージという相関関係があると言える。

6.2 方言コンプレックスの考察

次に、アンケート結果と方言コンプレックスの関係について考える。〈表3〉と〈表4〉の2つの表の比較から、全体的に〈表3〉の数値より〈表4〉の数値の方が高い事が分かり、尾張方言や三河方言の母語話者の方がそれ以外の方言の母語話者よりも、自分たちの方言に対してネガティブな認識を持っているということが分かった。ここでは、このことを、早野（2002）が述べている方言コンプレックスと関連づけて考えてみる。

方言コンプレックスとは、方言話者が、他者から受ける評価にとどまらず、自身の方言を

否定的に捉える「内在化された偏見」心理的な状態のことである。(早野 2002 : 89-98)

既に述べたように、尾張方言や三河方言の母語話者の方がそれ以外の方言の母語話者よりも、自分たちの方言に対してネガティブな認識を持っている。これは、それぞれの方言話者が他者から受ける評価にとどまらず、自身の方言を否定的に捉える「内在化された偏見」という現象と捉えることが出来る。一方、(親しみにくいー親しみやすい)の印象評定語に対しては、尾張方言、三河方言共に〈表3〉の数値の方が〈表4〉の数値よりも高くなっている。これは、尾張方言や三河方言を生まれながらに使用している話者の方が尾張方言・三河方言話者以外よりも聞き馴染みがあるので、自らの方言はポジティブに認識したため、あるいは、その逆に、尾張方言・三河方言話者以外がこれらの方言に馴染みがないためにネガティブに認識したのだと推測出来る。また、尾張方言話者と三河方言話者のみの数値を表でまとめた〈表5〉と〈表6〉を比較すると、尾張方言話者は、自身が話す尾張方言よりも三河方言の方をポジティブに認識している印象評定語が目立つ一方、三河方言話者の場合は、尾張方言と三河方言とで、その評価に大きな差はなかったと数値が示している。このことは、尾張方言話者は自らの方言に対する方言コンプレックスを持っていると言えるが、三河方言話者はそうではないことを示唆する。

したがって、愛知方言の母語話者は自身の方言にコンプレックスを抱いている。また、同じ愛知県内では、尾張方言話者は自らの方言に対する方言コンプレックスを持っているが、三河方言話者はそうではないという結論になった。

7. おわりに

本研究では、愛知県内の尾張方言と三河方言という2つの主要な方言を対象に、言語意識の差異とその背景について考察を行った。SD法を用いた印象評定語による分析と、テキストマイニングを通じた自由記述の分析を組み合わせることで、各方言の特徴的な表現や発音をもたらす方言に対する人々が持つ印象の違いを明らかにした。調査結果は、尾張方言がその独特なアクセントや力強い文末表現によって「標準語から乖離している」「乱暴」「不明瞭」といった印象を与える一方で、方言特有の郷愁評価と聞き手に強い個性を印象付けると考えられる。一方、三河方言は尾張方言に比べて、柔らかな文末表現と比較的標準語に近いアクセントにより、「穏やか」「上品」「礼儀正しい」といったポジティブな評価を得やすい傾向が確認された。つまり、尾張方言は特徴的な文末表現や独特のアクセントが特徴であり、これが「乱暴」「個性的」といった印象を与える一因となっている。一方、三河方言は柔らかな語尾表現と標準語に近いアクセントが特徴であり、「穏やか」「親しみやすい」といった印象を形成しやすいことがわかった。これらの違いは、井上(1989)が示した「情的評価」と「知的評価」、「郷愁評価」の分類を参考にすると、尾張方言の力強い響きは、東北弁や関西弁のように「個性の表出」として評価される一方で、「乱暴さ」や「荒々しさ」といったネガティブな側面を伴う可能性がある。一方、三河方言はその穏やかな語感によって「親しみやすさ」や「穏やかさ」といったポジティブな印象を受けやすいという事が分かつ

た。また、愛知方言話者と愛知方言話者以外では、尾張方言と三河方言共に言語意識の数値が愛知方言話者の方が低く、ネガティブに捉えているという傾向にあることが分かった。これは早野（2002）が述べている方言コンプレックスに当てはまると言え、方言話者が他者から受ける評価にとどまらず、自分自身の言語使用に対する認識や態度にも影響を及ぼし、自身の方言を否定的に捉える「内在化された偏見」という現象が数値として表れた結果であると考えられる。また、尾張方言話者は、自身の方言を低く評価する傾向がある。その評価は三河方言の評価と比較して全体的に低い数値である。このことから、尾張方言話者は方言コンプレックスを抱えていると考えられる。一方、三河方言話者は三河方言を尾張方言よりもポジティブに捉える印象評定語が多い。そのため、三河方言話者は方言コンプレックスの枠組みから外れていると言える。

以上の結果を踏まえて結論づけると、尾張方言と三河方言は同県内における方言であるが、文末表現や発音の観点から言語意識に多少の差異が存在し、愛知方言話者は方言コンプレックスを抱えており、中でも尾張方言話者は三河方言話者より方言コンプレックスを抱えているため、同県内の異なる方言間には言語意識の差異が認められると結論づける。しかし、本調査には未だ問題が残る。調査対象が50名に限定され、地域、年齢層、性別といった属性に偏りがある可能性が否定できない。また、SD法やテキストマイニングに重点を置いた分析は、定量的な比較には有効であるが、自由記述に含まれる個別の文化的背景や感情的ニュアンスの深掘りには課題がある。今後の研究では、より多様な層を対象とした調査や、インタビュー形式を取り入れるなど、異なったアプローチが求められる。また、先行研究との比較において、東海地方以外の方言（例えば東北弁や関西弁など）を加えた分析を行うことで、愛知県内方言の特徴を相対的に把握することも可能である。さらに、方言が話者自身のアイデンティティ形成にどのように影響を与えているかを探る研究も、方言研究の新たな展開として期待される。最後に、本研究を通じて、尾張方言と三河方言の差異は方言のアイデンティティであると言える。標準語化が進む現代社会において、方言は地域のアイデンティティを保ち、他地域との文化的多様性を豊かにする役割を果たしているのだと考える。

参考文献一覧

- 芥子川律治（1982）「7 愛知県の方言」『講座方言学 6 中部地方の方言』国書刊行会 pp.207-241
- 井上史雄（1989）「言葉づかい新風景（敬語と方言）」秋山書店 pp.159-256
- 金沢裕之（1991）「第6章 言語意識と方言」『新・方言学を学ぶ人のために』徳川宗賢、真田信治編 世界思想社 pp.117-131
- 大西拓一郎（1993）「第I部 日本語の方言概説 第3節 日本の方言－東日本－ 3.2.東北方言」『日本語教育指導参考書 20 方言と日本語教育』国立国語研究所 pp.22-23

- 平山輝男（1998）『全日本の発音とアクセント』NHK 放送文化研究所
『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会
- 早野慎吾（2002）「方言コンプレックスのメカニズム」『Ars Linguistica』Vol.12
pp.89-98 中部言語学会
- 山田敏弘（2011）「第2章 各地方言の実態—方言の現在」真田信治編
『日本語ライブラリー 方言学』朝倉書店 pp.56-73
- 吉永星瑠・村瀬俊樹（2022）「方言の使用が話者の印象に及ぼす影響：会話相手が使用することばとの関係」『人間科学部紀要 5』 pp.1-7 島根大学人間科学部
- OpenAI. (2024). ChatGPT による会話型 AI 分析. <https://chat.openai.com>